さとやま通信 ＜Vol.50＞

sa to ya ma つう しん

～「学研木津北地区」というのは鹿背山の里山のこと 里山活動を楽しみながら、里山再生に取り組んでいます～

さとやま通信は、平成24年5月の創刊から今月号で50号を迎えました。
この間に市の人口が約3,000人増加したことから、学研木津北地区の位置づけを再度お知らせします。

木津北地区とは？

住宅地開発を進めるためUR都市機構が取得して耕作が停止された鹿背山の里山は、薪炭林としての活用がなされなくなったこととあいまって、人の手が入らなくなり、竹林は繁茂し、森は倒木や枯れ木で人が歩けなくなり荒廃していきました。

平成15年にはUR都市機構による宅地開発が中止されたことから、多様な活動団体による里山再生プロジェクトがスタートしました。

このプロジェクトは市が引き継いだ後も継続され、現在では明るく気持ちのいい散策路や広場に生まれ変わりつつあります。

里山は使われてこそ意味があり、そもそも保全するとの考えは馴染みづらいものです。

里山の恵みから縁遠い生活をおくる現代人が、どのように再生しうるのか、この基本的な課題に対応し、かつてのように、活用することで守られてきた鹿背山の里山を取り戻すための挑戦を、さとやま通信でお届けします。

放置され篠竹が繁茂していた里山も

刈り取り斜面に光を入れることで、

植物が目覚めます。

みもろつく鹿背山里山学校開校

4月24日「みもろつく鹿背山里山学校」が開校しました。

近くに里山があるのに、里山で遊びをすることがなくなったこの時代、子どもたちに改めて身近な地域の里山に興味を持ってもらい、再生・保全のきっかけとなって欲しい。

そんな願いから始まった里山学校。

一年間で12回のプログラムをとおして、里山作業や収穫体験から里山活動を学びます。

今年度の参加者は、22人の小学生と18人の保護者の40人が入学。

第1回は、開校式に続き、鹿背山の里地里山の講義を受けた後、NPO法人京都発・竹・流域環境ネット鹿背山地区の活動地で竹の子掘りを体験しました。

講義では、鹿背山の里山に生息する植物やクワガタの捕り方に子どもたちは興味津々。

体験では、はじめて竹の子収穫に大興奮。春の里山を満喫していました。

快晴に恵まれたこともあり、参加者は早くも次回の活動が待ち遠しいようでした。

木津北地区保全推進室（都市計画課内）　☎75-1222